「死者にことばをあてがえ」　　（辺見庸『眼の海』より）

わたしの死者ひとりびとりの肺に

ことなる　それだけの歌をあてがえ

死者の唇ひとつひとつに

他とことなる　それだけしかないことばを吸わせよ

類化しない　統べない　かれやかのじょだけのことばを

百年かけて

海とその影から掬（すく）え

砂いっぱいの死者にどうかことばをあてがえ

水いっぱいの死者はそれまでどうか眠りにおちるな

石いっぱいの死者はそれまでどうか語れ

夜ふけの浜辺にあおむいて

わたしの死者よ

どうかひとりでうたえ

浜菊はまだ咲くな

畔唐菜（アゼトウナ）はまだ悼むな

わたしの死者ひとりびとりの肺に

ことなる　それだけのふさわしいことばが

あてがわれるまで